

セブインイレブン財団環境リーダー研修報告書

文責：佐々木美穂

私は、NPO リアスの森応援隊で、多くの山が手入れできずに荒れているという、日本の森林が抱える課題に挑戦すべく気仙沼市域の山々を豊かな海を支える豊かな山にしていく後押しをする活動をしています。

今回の研修では、小規模林業で循環可能な林業経営がスタンダードな林業先進国ドイツでの森と市民の関わり方を感じ、森づくりそのものの技術のみならず事業の拡大により事務局一人当たりの職員の業務量が増大している当 NPO において、自主事業の安定化やプロジェクトのコーディネート力、需要開拓のためのマーケティングについても課題解決への糸口を探したいと思いドイツに発ちました。

①訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本の NPO として生かせるか

訪問したラインランドファルツ州の環境省が入っている建物は農業や畜産、林業など、環境部だけではなく横の連携が取れる部門が同じ建物にありました。人口の41%が環境保護のボランティアに参加しているというラインランドファルツ州では、行政が環境保護になくってはならない存在であり、NPO や市民活動との協力体制を築いていました。行政はプロジェクトごとの資金提供だけでなく、より良い町づくりのための調査や議論を市民団体と行い、協働しているような印象がありました。講師のシュターデンさんにとっての NPO とは「コントロールシステムでありパートナーだ」と言います。一方、環境保護団体である NABU や BUND などの NPO サイドは、行政に頼りすぎる事なく自立した運営をすることでプロジェクトへの中立性を保っており、うまく Win-Win の関係を築いていました。お互いに依存するという協働の形ではなく、ゴールを明確に定めプロジェクトごとに役割分担をしています。山林整備の推進にあたり、行政との協働が不可欠である私にとって、明確なゴールへの認識を相互に確認し合う作業の必要性を感じることができました。

また、この研修ではファンドレイジング講座を二度、別の講師から受講する機会を頂きました。衝撃を受けたのはファンドレイジングとは「お金を集めること」だけではないということ。お金だけではなく、ボランティアのプロジェクトへの参加や理事の無給奉仕なども団体へのファンドとしてのカウントをす

るべきだということ。時間はその人にとって限りのあるもの。限りある財産をプロジェクトへの時間に費やしてもらうことは、れっきとした成果であるので、ソフト面もしっかりデータ化し、今後ソフト・ハード両面でのファンドレイジングが必要だと学ぶことができました。

ヘルク・シュナイザー講師の講義では、「会員数、会費収入、寄付額」この3点にこだわっての講義でした。「ファンドレイジングとは、資金・人材を集めることで、団体が商品だ。“感動”などで団体に商品価値をつけないと、だれも購入しない！」という言葉で、自主事業のことを考える前にまず、団体の理念から人にセールスできるように考え直す必要があると気づきました。確かに今回訪問した NABU や BUND と当 NPO との比較をすると圧倒的に違う点は「会員数、会費収入、寄付額」です。特に BUND は団体としての自立性を重視しており、ほとんど会費収入と寄付金で運営していました。資金面だけの自立ではなく、資金面を過度に他に頼ることなく運営することで、プロジェクト自体も他者の利益を気にすることなく独立性を保てます。そもそも、今まで私はこの3点（会員数、会費収入、寄付額）には目を向けてこなかったもので、前述の通り理念を考え直し3点の強化に挑みたいと思います。

なお、会員数や寄付者を増やすための NABU と BUND の広報力は団体の要でありました。なぜ今までおろそかにしてきたのだろうと、自戒の念が押し寄せました。広報をしっかりとしていない団体は団体自身の価値を自ら落としているにも等しい。両団体は訪問の際のプレゼンテーションの方法、配布する資料においても団体の価値をしっかりと PR できていて、団体理念を国も環境も違う私たちに共感させる力の強さに感動をしました。いかに人の心をつかみ、どのようなアプローチをするのか、人に共感される団体は人も物の金も集まってくるのだと確信しました。ファンドレイジングにも共通することですが、広報の方法を整えるというよりも、広報するための基盤を整えることが必要だと感じました。

②日本の環境 NPO 活動を支援するために必要な仕組み

民主主義を大切にしている環境を、森の幼稚園で強く感じました。朝、森の幼稚園に到着すると私たちより先に何人か子供達がすでに来ていました。3歳～6歳までの子供達20名がバラバラですごくその幼稚園です。先生たちの思いは「子供たちが自然と一緒に過ごしながらか、自然の為になにをしなければいけないか学んで欲しい」という言葉から分かるように、子供達の意味を汲み取る役

であり、自立へと導く役に徹していました。朝の会では、子供たちが自分たちで今日のリーダーを決め、今日自分たちが遊ぶ場所を決める。その子供達の姿はまさにデモクラシーの教育の賜物であり、人任せにするのではなく自分の頭で考え、自分の意見を話し、その意見には責任が伴うということを経験で学び、森から直接的に自然の事を学ぶことだけではなく、幼稚園という環境でまさに遊びながら学んでいました。幼少期の経験は大人になっても自身のアイデンティティとして残っていることが多いと思うが、こうして幼少期から森や自然と触れ合い、学んできた子供たちは、きっとこの先と切っても切れない存在になる、自然と共生する人間力の育成は最高の環境教育であると思います。

また、私たち大人も、環境 NPO で活動をしていると、感覚や思考が凝り固まってしまい、考えやアイデアが一つにとどまってしまうことが私の場合は多々あります。どうしても同じメンバーで議論をしていると、活動の広がりには限界があります。今回の研修で、いかに活動を知らない人に活動の仲間になってもらうような感動させることが重要かと痛感しました。そのような広報やプレゼン方法を相談できるメンター制度、また、今回の研修のような新たなインスピレーションを受けられる研修制度は、支援を受けたいと思います。

また、環境 NPO と環境 NPO を支援したい企業をつなぐ場は両者にニーズがあるにも関わらず、知り合い伝いや公募が多いと思いますが、コンペを募集するなど、実際に商談できるような場があれば面白いのではと考えます。

③全体の感想

ドイツで10日間を過ごし、まっすぐに自分の活動と向き合う時間であり、たくさんのインスピレーションをうけ仕事に戻りこの経験をいかに生かすか、楽しみな気持ちでいっぱいです。ドイツでの研修以外での生活でも、私の環境への意識は変わりました。

まず、プラスチックへの問題意識についてです。レジ袋(プラスチックバッグ)は店で買い物をした時、渡されることはありません。エコバッグを持っていないければエコバッグを購入するか商品を裸のまま持ち帰るしかありません。

次に、水資源への意識も変化しました。ドイツには有料トイレがあります。なぜ有料かと、日本に住んでいる者ならと思いますが、「水」を使うからです。日本に住んでいれば水はタダだと勘違いしがちです。地球上で一番お金のかかる液体、それが飲料水です。大切な資源だという認識があるからこそその有料トイレです。また、ホテルのタオルやベッドシーツも、当たり前毎日新しいもの

に交換してもらえると書いていたのですが、ドイツでは汚水削減のため、交換してほしい人しか効果してもらえません。

いつも当たり前に使って捨てている物は、環境汚染の上で成り立っている物だと、恥ずかしく思いました。この日常生活へのエコの意識は、私は日本に帰っても資源を大切にすることを送ると思います。

最後に、研修の全体の感想ではないかと思いますが、今一番心の中にある気持ちを書きます。

このままの日本では、表面だけの真実を見て思考停止し、それ以上考えないでしまう若者が多くなるのではないかと危機感を感じました。私は再生可能エネルギーにも関わっているのですが、特に改めて感じたのは日本のエネルギー問題についてです。日本は原爆で被災し、さらに福島原発の事故があったにもかかわらず原発をまだ止めようとしていない。その状況は世界基準でみると（一歩、日本の外側から事実を見てみると）どうにかしています。だれもその状況に疑問を持とうとしない年代が多く、人の命よりも経済循環についての心配をしたりしています。「人が生きていくに値する社会」とは程遠い場所そんな場所になりつつあると感じていました。福島原発事故後、原発を止めると決めたドイツでは、現在再生可能エネルギー自給率が65パーセントもあり再生可能エネルギー大国とされています。車で走ればあちらこちらに風力発電の風車が無数にあり、太陽光パネルは公共の建物はもちろん家庭の屋根にも至るところに設置してありました。しかし、そんなクリーンでエコを売りにしているドイツには、代替エネルギーの代替のような裏がありました。原発を止め、再生可能エネルギー自給率を上げましたが、まだ100パーセントには届かない。そこで炭坑に力を入れ、炭坑が掘れる町は歴史的建造物であろうと環境保護地区であろうと、ワインの名所であろうと関係なく、有無を言わず立ち退かせ、町をひとつ掘り返す。経済の為に個々の歴史を蝕む、自然を蝕む、そんな人権侵害・自然破壊の現場を目の当たりにした時は、本当に人間の滑稽さを痛感しました。一時の利益で人類の財産をなくしている現場でした。そんな状況と25年間も戦う活動家の思いにふれ、日本も黒歴史になろうとしている今をどうにかしなければいけない。人が生きていくに値する、環境のいい社会・環境を作りたい。と思いました。